
研究課題 近世初頭長崎の華僑社会と唐人貿易の研究

課題番号 (06610299)

平成6, 7年度科学研究費補助金 (一般研究 (C)) 研究成果報告書

平成8年3月

研究代表者 安野真幸

(弘前大学教養部)
教授

はしがき

「近世初頭長崎の華僑社会と唐人貿易の研究」という我々のテーマは、長崎における華僑社会の前身と見做されている「唐人屋敷」の成立までの唐人貿易の変遷過程の解明を課題としている。しかしこれについてはすでに幾つもの先人の研究もあり、私も多少述べたことがあるので、ここでは研究の方向を「唐人屋敷」成立以前の中国人たちの在り方の解明に、すなわち中国人たちが日本人と何らの区別なく雑居可能であった理由の解明に転換することにした。

なぜなら「華僑」という言葉は19世紀的な「国民国家」を前提としたもので、日本の場合、直接には幕末の開国以降に来日した日本国籍を持たない中国人を指し、彼らの前史としては「唐人屋敷」に寓居した「來船唐人」のみが問題となり、鎖国令と共に日本人化した「住宅唐人」はここから除かれてしまい、鎖国令発布以前の日本社会において日本人と雑居していた渡来唐人たちの社会を捉えるためには「華僑社会」という言葉は不十分だからである。

つまり19世紀的な「華僑」という言葉では、近世以前に日本など海外に移民した中国人たちの実態を捉えることはできないのである。それゆえここでは、中華帝国を中心とする東アジア世界の中での日・中両国間の永い歴史を見直すことを通じて、移住する中国人側の在り方や、受入れ側の日本社会の条件を明らかにすることに努めたい。とくにここでは日本に平和的に移住した中国人たちと無縁だとされてきた「倭寇」を「華僑」の一形態として考えて行きたい。

研究組織

研究代表者：安野眞幸（弘前大学教養部教授）

研究経費

平成6年度	600千円
平成7年度	300千円
計	900千円

研究発表

(1) 学会誌等

安野眞幸 長崎の唐人屋敷 中近東文化センター研究報告 歴史の中の藩・藩町1—その成立と形態をめぐって— 11巻 1994年

安野眞幸 カステラの生まれた自由都市、長崎 カステラ文化誌全書 1995年

(3) 出版物

栗津則雄 カステラ文化誌全書 East meets West 平凡社 1995年

1. 問題の所在

近世初頭の国際貿易都市長崎において、「出島」に閉じ込められる以前のポルトガル人たちは「内町」の船宿に寄宿し、長崎の町を自由に動き廻ることが出来たが、その範囲は「内町」を越えることはなかつたろうと考えられる。一方「唐人」と云われた当時の中国人たちは、日本人と何の区別もなく長崎の町全体に雑居していたのである。またいわゆる「文禄・慶長の役」によって日本に連れて来られた多数の朝鮮人たちも長崎の町に住んでいたが、彼らは「外町」に「高麗町」「新高麗町」を築きさえたのである。それゆえ“なぜ「唐人」たちだけは日本人と何ら区別なく雑居し、「唐人町」を築かなかつたのか”は大きな疑問であり、その理由を明らかにすることがここでの我々の課題である。

今長崎「新地」にある中華街の起こりについては、幕末の開国後、渡来唐人管理のために作られた「唐人屋敷」が不要となり、解体され、そこから追われた中国人たちが「広馬場」や「新地」などに移り住み、こうして出来たのが「新地中華街」だと説明されている。さらに現在の世界の大都市を眺めた際、チャイナタウンを築くのは中国人華僑一般の特徴とも思われる。とすれば「唐人屋敷」成立以前に中国人たちが日本人とまったく区別なく長崎に住み着いていたことは、大変興味ある出来事なのである。当時の長崎には大量の中国人が住んでいたのに“なぜ彼らは集住することなく、日本人と雑居していたのか”また“どうしてそうしたことが可能だったのだろうか。”

2. 分析の視角……華僑と倭寇

今、日本人と中国人とのこうした雑居状況を「倭寇的状况」と名付けることが、日本史を「アジアの中の日本」として捉え返そうとのパラダイム変換を主張する荒野泰典氏から提案されている。これは日本人と中国人を区別しない状態を、中世後期の「倭寇」との連続で捉えるべきだとの主張として理解してよいだろう。さらにこの主張の前提には「倭寇」というものを「国境を越えた人々の結合」とする倭寇観がある。確かに「倭寇的状况」が近世初期長崎の中国人を捉える際のキーワードになるとしても、なぜこのような状況が可能であったのかの問いは依然として残るのである。さらに我々の問いは“中国人海商はなぜ「倭寇」の群れの中に加わつたのか”と云い直すこととなろう。

「華僑」といえば一般に東南アジアに出かけた中国人を指し、斯波義信氏のいう漢民族の「熱帯へのマーチ」という言葉が思い出されるのだが、「倭寇」もまた華僑の東方への発展の一つの形態であったのではあるまいか。嘉靖大倭寇の中心となつた王直は「徽王」を称し、平戸に二千人の部下を従えていたと云われている。彼は華僑の王でもあつたのではないか。日本における「倭寇」の研究史が、最初は明治のナショナリズムを背景として「日本人の海外勇飛」として語られ、戦後はその反省から「その実態はほとんどが高麗人や中国人であつた」とし、「後期倭寇」と云われる人々のうち日本人はほんの二・三割で、そのほとんどは中国人であつたとされている。

ここで“当時日本人が中国人になるにはどのようなルートがあつたのだろうか”との問をあえて立てて見よう。中国の官僚知識人である士大夫と同じ漢字・漢文の教養を身に付

けることが必要だったと仮定すれば、室町期であれば彼ら士大夫と同じ教養を身に付けた人々として、禅宗の「五山」の僧侶を挙げることが出来るが、彼らは中国に生まれ育った人でないので士大夫にはなれなかったと思われる。またイスラム世界と比較した場合、外国からの大規模な奴隷購入のない点が中国社会の特徴の一つと思われるのだが、そのことの結果、日本人が奴隷として中国社会に連れて来られ、そこでさらに解放されて中国人になるというルートもなかったことになる。

一方倭寇には、今藤木久志氏が精力的に明らかにしている日本国内の戦場で行なわれた奴隷狩り・掠奪行為の国外版としての側面があり、倭寇の行くところはどこでも人狩りが大々的に行なわれ、奴隷売買や身代金の請求がそれに伴ったのである。さらに倭寇は、一度掠奪し奴隷化した人々を、日本将棋の駒のように、今度は逆に「倭寇」の一員として軍の先鋒に据えることさえしたのである。それゆえ中国人が「倭寇」の群れに投げ日本人となるのは簡単で、諸肌を脱ぎ「さかやき」を剃り、日本刀を振り回せばよかったと田中健夫氏は述べている。以上から、日本人の中国人化は難しく、逆に中国人の日本人化、中でも倭寇化は易しかったことになる。

しかしながら事柄が簡単か困難かではなく“なぜ中国人海商は他ならぬ「倭寇」の群れに加わり、朝鮮海賊や琉球海賊、ベトナム海賊や東南アジアの海賊に身を投じなかったのか”を問うとすれば、先人の研究は依然として現象の中をさまよひ、未だ事柄の真の説明には辿り着いていないと思われる。つまり前期倭寇を含め一般に「倭寇」を「国境を越えた人々の結合」とし、済州島を中心とし東シナ海の舟山列島・五島列島・壱岐・対馬・松浦半島・朝鮮半島西南の多島海等々を「倭寇世界」とすることは、事柄の一面を正しく突いていると思うのだが、逆に国境や国家を越えたインターナショナルな人々の組織がなぜ「倭」をもって結合したのかの側面は依然として説明されていないのである。

倭寇の活躍した時代、明皇帝から冊封を受けた室町将軍は「日本国王」に任ぜられ、日中間の交易は「勘合貿易」で行なうこととなっており、一方「勘合符」を持たない貿易は禁止され「倭寇」とみなされたのである。それゆえ日中関係において、中国皇帝から見て秩序の側の代表者には「日本」という名称が、アウトローの側の代表者には「倭」という名称が与えられていたことになる。他方、国禁を犯して海外貿易に乗り出した中国人海商もまた中国皇帝から見てアウトローとみなされていたことは明らかであり、それゆえ「倭寇」とは、今風に云えば、日本の「ヤクザ」にチャイニーズ・マフィアが合流したようなアウトローの国際的な結合体だったことになる。

暗黒街の組織が国境を越えて互いに結合することは一般にありそうな事柄ではあるが、「倭寇」が日本や中国の国家の側からは共にアウトローの立場にある人々の結合体であり、そうしたものとして初めて「国境を越えた諸民族の結合体」でもあったのである。「倭寇」についての新しいパラダイムは、国境や国家を越えた人々のインターナショナルな組織と云う明かるい側面をクローズアップすることにあるが、「倭寇」の持つこうした暗黒面・否定的な側面もまた無視してはならないと思われる。ともあれいずれにせよ“なぜ彼らは「倭」をもって結合したのか”と云う問題は依然として残り、日本における初期華僑の研究という我々の課題は「倭寇」研究に席を譲ることとなる。

3. 分析

(1) 中世の日中関係……「体制外通商関係」

中村栄孝氏は中国と周辺諸国間との政治的な関係として「冊封体制」「会盟体制」「修貢体制」「体制外通商関係」の四つを数えている。「会盟体制」は北方の遊牧民との関係で、東アジア世界には見られないのでこれを除くと、中国皇帝と君臣関係にあるのが「冊封体制」、君臣関係にはないが中国皇帝に朝貢するものが「修貢体制」となる。「体制外通商関係」とは国家間の正式な外交関係を持たないが、経済的には平和な通商関係にあるものである。これらは共に中国王朝と親疎の点で段階的な違いはあるが、政治的であると同時に経済的であるところに特徴がある。

それゆえ、中国王朝の黙認した「体制外通商関係」の次には、バイキングのような狩獵や海賊行為に連続する冒険的な本来の通商活動が考えられよう。「倭寇」とは本来このようなものであったが、中国王朝が禁止したことから、ここではこれを「アウトローの通商関係」と名付けたい。以上から中国王朝と東アジア諸国間には「冊封体制」「修貢体制」「体制外通商関係」「アウトローの通商関係」の四関係が同心円的に成立していたことになる。歴代の中国王朝と高麗・朝鮮・琉球・ヴェトナムなどの関係がすべて「冊封体制」で理解できるのに対して、日中関係は複雑である。

西島定生氏が明らかにされたように、古代日本における国家成立期の問題、つまり「漢倭奴国王」の金印や「邪馬台国」「倭の五王」の問題を解くには「冊封体制」論が有効である。また「遣隋使・遣唐使」で知られる日本と「隋・唐」との関係は「修貢体制」であった。しかし「宋」代以降の日中関係は「体制外通商関係」を基本としながらも「倭寇」と云う「アウトローの通商関係」を伴っていた。「倭寇」対策上「元」は日本に「修貢体制」を求め、「明」は室町幕府を「冊封体制」に組み込み、15世紀から16世紀の間は「勘合貿易」が行なわれた。

以上から中世の日中関係は「アウトローの通商関係」から「冊封体制」までの幅広い関係を持っていたとなり、長い時間軸で眺めた場合、朝鮮・琉球・ヴェトナムなどと比較して「日本は中国を中心とする国際秩序＝華夷秩序に対して比較的自由的な立場をとりえた」となる。その理由には「日本が島国だから」が挙げられよう。つまり“朝鮮・琉球・ヴェトナムなど中国の周辺国においては中国の影響が圧倒的であったが、日本は孤立した島国だから影響を受けないですんだ”が今多くの学者の考えのようである。これは我々の常識にマッチし、説得的に見えるが、果たしてそうだろうか。

第一に、これでは日本の国家成立期の問題は解くことができない。網野善彦氏の議論を上げるまでもなく、海というものは一見人と人とを隔てるもののように思えるが、人と人とを結び付ける働きもし、島国だからこそ逆に海外と強く結び付いていたとも云えるのである。地理的な条件でないとすると、我々はその理由を日中間の具体的な交流の事実の中に求めなければならない。「宋」代以降、政治的な「冊封体制」に代わって経済的な「東アジア交易圏」が成立したとされている。それゆえ我々は次にこの「東アジア交易圏」の問題を考えて行きたい。

(2) 東アジア交易圏と物産複合

東アジア諸国に多くの中国人海商がおしかけ、活発な商業を行なったことから「東アジア交易圏」は成立した。日本が「東アジア交易圏」に取り込まれるのは宋商人の来日以後のことである。足立啓二氏は「北宋期の全国規模の物流は国家財政を起動力としており、巨大な国家的・財政的物流は国内物流のみならず対外的な物流においても規定的・自己完結的であった」述べている。中国においては有名な塩・鉄の生産・販売のみならず、当時広く世界に輸出していた絹織物や高級陶磁器の生産の多くも、また北方の遊牧民との絹馬交易・茶馬交易に必要な茶の生産も皇帝の直営であった。

こうした背景の下で「北宋銭」は中国国内の貨幣であると共に東アジアにおける国際的な商品交換の尺度「対外貨幣」となった。斯波義信氏はこの「北宋銭」に関して「唐の751年に年間八四〇トンに達した鑄銭は、広東で大銅鉞が開発され、宋の十一世紀には年に一万トンを越えるピークを迎える。この『北宋銭』を中心とする巨量の銭が鑄貨途上国の日本、朝鮮、ベトナム、ジャワにながれ、それぞれの国でストックされて通貨の座についた」と述べている。当時の日本社会は中国銭を交換手段とし、日用雑器の茶碗類や絹織物のすべてを中国からの輸入品に頼るなど、中国の流通圏内にあった。

宋と東アジア諸国間の貿易を見た場合、中国側の輸出品が付加価値の高い陶磁器や絹織物、銅銭などの工業製品であったのに対して、日本・朝鮮・ベトナム等がその見返りに輸出出来たものは、第一次産品である人参・木材等々各地の特産物であった。川勝平太氏の云う「物産複合」の考えに従うなら、中国からの輸出品、陶磁器・絹織物・銅銭などは単なる商品ではなく、背後に文化を背負ったもの、人々の生活様式を規定する力を持ったもので、これらの商品が中国国内に流通することで、国内を文化的に均一化したのと同様なことが、中国と東アジア諸国間にも見られたと思われる。

それゆえ東アジアは、これらの商品を通じて「東アジア交易圏」という一つの世界に纏め上げられたと見ることが出来、これらの商品は西島定生氏が「冊封体制」を考えられたときの漢字・漢文や律令法・儒教・仏教などと共通した働きをしたのである。ところで「東アジア交易圏」に属する国々が対中貿易を続ける限り、一方では中国製商品の輸入を通じて中国風な「生活様式」への模倣が強制され、他方では輸入の促進が、特産物である第一次産品の輸出国へと社会を導き、跛行的なモノカルチャー社会へ、さらには社会の化石化へと導く危険性を持っていたことになる。

つまり東アジアの諸国にとって交易の発展は、中国への「同化」強制と、中国とは異質な社会になれと云う「異化」強制を同時に受けることとなり、諸国をダブルバインド状況に陥らせたのである。それゆえ朝鮮やベトナムはこのジレンマから逃れるために、一方では中国からの輸入を減らしながら、他方中国王朝の制度や工業を積極的に模倣したのではあるまいか。こうして中国製品の輸入を通じてダブルバインド状況に置かれた東アジアの諸国は、中国文化の模倣から政治的な従属へと強いられ、中国を中心とする「華夷秩序」へ編入させられて行ったと思われる。

(3) 中国流通圏の中の日本

ところで、足立啓二氏によれば「前近代日本の銭の歴史」は相互に独立した三つの時期からなっていると云う。第一期は皇朝十二銭の時代で、八世紀初頭の「和銅開珎」の鑄造から十世紀中期の鑄造・流通の停止まで。第二期は中国銭流通の時代で、十二世紀後半から「銭の病」と云われる混乱を伴いながら始まり十五世紀の終りの「撰銭」という混乱期を含み十六世紀後半まで。第三期は一六三六年の「寛永通宝」の鑄造以来の国内銭流通の時代なのだが、銭が金銀貨の補助貨幣の時代である。日本史上で普通「中世」と呼ばれる時代は、ほぼこの第二期と重なろう。

中国で作られた「銭」は本来「民間における流通手段の提供」を目的としたものでなく、何よりも「中国専制国家の財政」と密接に結び付き「専制国家の支払い手段」として鑄造された。第一期の皇朝十二銭もまた日本版専制国家の国家的支払い手段で、律令財政成立とともに生まれ、その終焉とともに終わったと云う。ところで、ここで云う「専制国家の財政」「国家的支払い手段」とは、官僚制を備えた中央集権的な「郡県制」の国家を前提としているのだが、日本の中世はそれと対比しうる「封建制」の社会であった。このことが「銭」とどう関連しているのか、それが問題である。

入間田宣夫氏は、宋商の来日によって形成された十二世紀初頭の日本列島内外の交易ネットワークが、武士団や領主制の成立と密接な関係にあったとしている。しかし日本の中世社会は、「銭」を通貨とする中国流通圏に属しながらも「中国的な文明の価値観からすれば異端であり、野蛮そのものである」と氏に云わせるほど、政治的・文化的に中国社会とは異質であった。つまり日本の中世社会は中国皇帝の支配圏外にあり、中国の中央集権的な支配体制とは程遠い封建社会でありながらも、経済的には中国社会と一体で、当時の日本人は中国人と同じ日用雑器、同じ銭を用いていたのである。

特にここで注目すべきは、当時の日本社会が東アジア世界の中で中国社会に次いで流通経済の発展した社会であったと云うこと、またこれとほぼ同じ頃、中国と陸続きの高麗・朝鮮やベトナムの安南、あるいは琉球においては、銅貨鑄造が行なわれたという事実である。日本社会に流通した渡来銭には、少数とは言えこれら高麗銭・安南銭等が含まれており、これらは中国銭と区別なく流通していたと云う。斯波氏の議論からも明らかなように、朝鮮やベトナムの社会において、王朝の鑄造銭と中国からの渡来銭は共に貨幣として流通していたと思われる。

それゆえ流通経済の発達した社会でありながらも、政権が銭を鑄造せず、もっぱら渡来銭をもって国内の流通手段とした日本の第二期は、東アジア世界の中では特異な存在となろう。中国貨幣が日本社会においてもそのまま通用した点で、東アジアの中で日本が一番中国社会との経済的な一体性が強かったとなろう。このことが中国人たちが日本社会において日本人と何の区別なく雑居していた理由であると思われる。網野善彦氏もまた『日本中世の民衆像』の中で、日本の中世社会が開放的で、「唐人」たちが日本社会に「職人」として位置付けられ、自由に活動していた事実を明らかにしている。

(4) 日本の特殊性……金と銅銭の交易

朝鮮やベトナムという東アジアの諸国が小中華帝国を目指し、中国とよく似た中央集権的な国家体制や銭・陶磁器等の製造を行なったのは、これらの国々の技術が日本より「進んでいた」からではなく、むしろダブルバインド状況に置かれ、模倣が強いられていたからであろう。それゆえ中国周辺の諸国は攘夷から文明開化へと進んだ幕末・明治の日本とよく似て、愛憎相半ばする思いをもって中国に対したと思われる。となると「なぜ日本だけはこのダブルバインド状況から自由であったのか」「なぜ日本は中国を中心とする華夷秩序から自由であったのか」が改めて問われることになる。

日宋貿易において日本は金・真珠・材木等を輸出し、宋王朝はこれを買上げるのに銅銭を支払ったと云う。当時「金」は中国国内において貨幣としての役割こそなかったが、贈答品として大いに珍重されたと云う。それゆえ日本が稀少価値のある「金」を輸出できたことから、日本は「金」をもって中国製の陶磁器・絹織物・銅銭などを買う立場に立つことが可能となり、中国に対する日本の政治的な立場は優位なものになった。そのことの結果日本はダブルバインド状況に陥らずにすみ、中国を中心とする政治的な「華夷秩序」の外に立って、自由に貿易をすることができたのである。

中世から近世にかけての日本の輸出品としては、日宋貿易における「金」、日明貿易で中国の「生糸」と引替えたものが「銀」、近世初頭の日清貿易の主要な輸出品が「銅」であったことは有名である。南蛮貿易・朱印船貿易とはそもそも中国と直接貿易をせず、東南アジアを仲介して日中間の貿易を行なう仕組みであった。「清」国との関係もまた、正式な国交はないが平和的な通商を続ける「体制外通商関係」であった。つまり総じて日本は貴金属・貨幣商品を中国に輸出し、その見返りとして中国を中心とする華夷秩序からの政治的な自由を手に入れることが出来たのである。

宋商人の来日によって第二期が始まるころ、日本の朝廷は宋銭の使用を禁止する法令を出した。ここには古代における「小中華帝国」の思い出はあっても、現実の「東アジア交易圏」に対し、積極的に対応しようとする現実的な姿勢を読み取ることは出来ない。「銭の病」があったのもこの頃のことであろう。一方、日宋貿易は平清盛や鎌倉幕府など武家の手によって推し進められて行った。当時日本が輸出した「金」は奥州の砂金によったと思われ、奥州藤原氏の栄華や鎌倉幕府が奥州を征服し、九州に鎮西探題を置いたことの意味はこうした点から考えなければなるまい。

日宋貿易開始後の日本が中国を中心とする「華夷秩序」の外に立ち、中国王朝の制度を模倣しなくてもよい自由を手に入れ、中国王朝に対して政治的な自由を主張出来たことと、鎌倉幕府が中国王朝の中央集権的な官僚制度とはまったく異質な「封建」的な国家を作り上げたこととの間には密接な関係があると思われる。日本人の海商が中国皇帝の望む「贈与貿易」や「管理貿易」の外で自由に活躍出来たことや「倭寇」の成立もまた、こうした日本の特殊性から考えることが出来、中国人海商が「倭寇」に身を投じた理由もまたここにあると思われる。

4. むすび

以上の考察を纏めると、「倭寇」が「華僑」の一形態である理由は次のようになる。

①・当時の日本は中国人海商たちを引き付けるに足る魅力ある輸出商品＝「金」を持ち、中国王朝にたいして政治的な自由を主張しえたこと。②・しかし経済的には中国社会と一体で、中国の貨幣は日本においてそのまま通用し、来日した中国人海商は日本人と何らの区別なく活躍し、雑居出来たこと。③・日中間には政治的な関係の薄い「体制外通商関係」や、本来的な通商関係「アウトローの通商関係」が可能で、後者に加わった中国人が「倭寇」となったこと。

近世初頭の日中関係として、「明」から「清」への王朝の交代に際して、鄭成功が日本を一つの足掛かりとして清への反抗を続けたこと、明王朝の滅亡の際の大量の明人の日本への亡命、を挙げることが出来る。鄭成功の活躍は後期倭寇の王直に連続するものである。また元が滅び明が起こったとき、元朝の人々は大量に東南アジアに亡命したが、これは元王朝が海の道＝セラミック・ロードでイスラム世界と結び付いていたことと密接な関係があるという。それゆえ明人の亡命も“なぜ日本へだったのか”の問いが成り立ち、日明間の関係の深さと「倭寇」と「華僑」の結び付きが再確認させられる。

日本列島の歴史を日用雑器としての茶碗類を軸にして、考古学的・生活史的な視点で時代区分をすると、縄文時代・弥生時代の後に土師器・須恵器の時代が来ることは有名であるが、「中世」は中国陶磁器の時代、鎖国後の「近世」は国内陶磁器の時代となるのである。つまり第三期の「寛永通宝」の鑄造と同時に日本国内から古銭の使用がなくなり、日用雑器もまた中国朝鮮などからの輸入品から瀬戸・伊万里などの国内製品へと変化したのである。それゆえ第三期の「寛永通宝」の鑄造は、日本社会の中国流通圏から独立をもっともシンボリックに示すものなのである。

清朝成立後の江戸時代人は日本こそが「中華」とする「華夷変態」の考えを持つに至ったが、日本が中国の一周辺国として小中華帝国の自覚を持った例としてよりも、むしろ中国を中心とする華夷世界からの独立の自覚として捉えなければなるまい。明治に至り、日本は日清戦争に勝利して朝鮮を清国の「冊封関係」から離脱させ、日露戦争後には韓国を併合し、日本こそ「中華」の観念は事実で証明されていった。明治以降現在においても、中国から大量の留学生が来日しているが、日本古代国家の遣唐使・留学生・留学僧の派遣と比較すると、彼我の関係の逆転は明白である。

日本が今多くの中国人留学生を引き付けている魅力は、江戸時代以来の「蘭学・洋学」の成果であると一般には考えられている。角山栄氏もまた“日本は西欧文明の「変電所」と述べ、日本がいち早く西欧近代文明を翻訳・吸収出来たことをもって、日中間の華夷秩序逆転の理由に挙げているが、明治以降の文明開化の歴史を離れて、もっと大きなスケールで中世から近世にかけての日・中関係史を眺めた場合、深い大きな歴史のうねりとして、日本が中心で中国が周辺と云う華夷世界の逆転関係が次第に形成されつつあったと纏めてよいように私には思われる。

5. 参考文献

- 足立啓二「東アジアにおける錢貨の流通」『アジアの中の日本史Ⅲ』東京大学出版会 1992年
- 網野善彦『続・日本の歴史をよみなおす』筑摩書房 1996年
- 網野善彦『日本中世の民衆像』岩波新書 1980年
- 荒野泰典「日本型華夷秩序の形成」『日本の社会史1』岩波書店 1987年
- 荒野泰典「東アジアの華夷秩序と通商関係」『講座世界史1』東京大学出版会 1995年
- 入間田宣夫『武者の世に』集英社版日本の歴史7 1991年
- 入間田宣夫「比較領主制論の視角」『アジアの中の日本史Ⅰ』東京大学出版会 1992年
- 川勝平太『日本文明と近代西洋』NHKブックス 1991年
- 斯波義信「華僑」朝日百科・日本の歴史31 1986年
- 斯波義信『華僑』岩波新書 1995年
- 田中健夫『倭寇』教育社歴史新書 1982年
- 中村栄孝「十三・四世紀の東亞情勢とモンゴルの襲来」岩波講座『日本歴史6』1963年
- 西島定生「日本歴史の国際環境」東京大学出版会 1985年
- 藤木久志『雑兵たちの戦場—中世の傭兵と奴隸狩り—』朝日新聞社 1995年
- 湯浅赳男『文明の血液』新評論 1988年